

## 報 告

## 地域子育て支援事業の効果に関する研究

—母親の親性の発達に影響する要因—

小川 佳代<sup>1)</sup>, 榮 玲子<sup>2)</sup>, 野口 純子<sup>2)</sup>, 三浦 浩美<sup>2)</sup>  
竹内美由紀<sup>2)</sup>, 舟越 和代<sup>2)</sup>, 宮本 政子<sup>2)</sup>, 大池 明枝<sup>3)</sup>

## 〔論文要旨〕

本研究の目的は、地域子育て支援事業に参加した母親166名を対象に、支援事業に参加して得た効果と「親性の発達」の関連を明らかにすることであった。

「親性の発達」は、『柔軟さ・寛大さ』、『視野の広がり』、『運や伝統・価値観の尊重』、『生きがい・存在感』、『自己抑制』の5因子に分類できた。支援事業に参加して、子育てを楽ししいものと捉えられた母親は、『柔軟さ・寛大さ』と『視野の広がり』が見られ、他の親と友人になれた母親は、『柔軟さ・寛大さ』が見られる傾向が示された。

Key words : 地域子育て支援事業, 子育て中の母親, 親性の発達

## I. はじめに

近年、子どもや家庭をめぐる問題が複雑・多様化し、育児不安や虐待など多くの社会的問題が生じている。育児に対する考え方や育児の方法は時代により大きく変化するが、現代社会における少子化や核家族化の進行は、わが子を産んで初めて子どもと接する親や、地域の人々との関係が希薄な孤立した親を生み出し、育児に対する不安や負担を増加させる要因となっている。そのため、国による新しい少子化対策として、「子育て支援策」が推進されている。そして、子育て支援活動の役割や必要性について指摘したさまざまな研究報告<sup>1-6)</sup>も見られる。著者らは、平成17年度よりA地域子育て支援セ

ンターにおいて実践活動を行い、これまでにその概要について報告した<sup>7)</sup>。そのなかで、母親の身近に子育てを手伝ってくれる人はいても、不安やストレスを自由に話し合ったり、困った時気軽に相談できる人がいない現状が明らかになった。そして、先行文献<sup>1-4)</sup>と同様に、母親が子育てを通じて、他の母親と関係を深めたり、社会の中で自分の存在価値を再認識できるような支援が求められていることを実感した。

そこで、支援事業の評価を行い、参加した母親にどのような影響を及ぼしているかを明らかにし、効果的な実践につなげていくことが重要と考えた。柏木らは、親を親自身の人格発達の視点で捉え、育児することの意味を問い、「親となる」ことによる親の発達について検討して

Research on the Effect of a Community-based Child-raising Support Program  
— A Factor in Influence on Development as Parents —

〔2016〕

Kayo OGAWA, Reiko SAKAE, Junko NOGUCHI, Hiromi MIURA, Miyuki TAKEUCHI,  
Kazuyo FUNAKOSHI, Masako MIYAMOTO, Akie OOIKE

受付 08. 2. 4

採用 10. 2.24

1) 四国大学看護学部 (研究職)

2) 香川県立保健医療大学保健医療学部 (研究職)

3) 穴吹医療カレッジ保健看護学科 (教育職)

別刷請求先: 小川佳代 四国大学看護学部看護学科 〒771-1192 徳島県徳島市応神町古川

Tel : 088-665-9248 Fax : 088-665-8037

いる<sup>8)</sup>。筆者らは、子育て支援を通じた母親の体験が、母親自身の知識を深めたり、他の親との関わりによって地域社会の連帯感を強めたりでき<sup>1-4)</sup>、そのことは親としての発達につながるのではないかと考えた<sup>9)</sup>。つまり、母親が親として自立できるような支援が「親となる」発達を促進し、育児不安の軽減にも通じると考えた。本研究ではそれを「親性の発達」と捉える。

そこで、今回の研究では、地域子育て支援事業（以後、支援事業）に参加した母親を対象として、その支援事業に参加することによって母親が得たと捉えた効果と「親性の発達」の関連について明らかにする。そして、支援事業によって得られる効果が、母親の「親性の発達」にどのような影響を及ぼすのかを検討することを目的とする。

## II. 用語の説明

1. 「親性の発達」とは、親が子育ての体験を通して、子どもや家族、社会の人々との関係性が広がることによって発達する人格形成の向上や変化を指すこととする。
2. 「支援事業」とは、厚生労働省の新エンゼルプランに基づき、保育所等に併設された子育て支援の活動を指す。
3. 「支援事業に参加することによって得られた効果」（以後、「効果」とは、子育て中の母親が支援事業に参加することによって得られたと捉えたものを指す。

## III. 方法

### 1. 対象者

A市内にある全10ヶ所の支援事業に参加した母親246名であった。各支援事業は年度で区切られ、毎年、4月～翌年3月までの登録制で実施しており、本研究の対象者は2006年の4月から事業に参加している母親である。

### 2. 調査期間

2007年1月～2月。

### 3. 調査方法と内容

無記名の自記式質問紙調査を行った。内容は、①対象者の属性、②効果を問う独自に作成

した「子育て中の親と話ができた」、「子育て中の親と友人になれた」、「他の子どもと遊ばせられた」、「遊びを体験させられた」、「悩みを相談できた」、「知識が吸収できた」、「子育てが楽しくなった」の7項目で、効果の有無を選択してもらった。項目は、筆者らがこれまでに行った、支援事業に参加した母親を対象とした「支援事業への期待」や「参加継続の理由」の調査をもとに選定した<sup>10)</sup>。③先行文献「親となることによる発達」<sup>8)</sup>に関する27項目で、「いつも感じる」4点～「全く感じない」1点の4段階リカート尺度。これは、親としての生き方を生涯発達のみにた「柔軟さ」、「自己抑制」、「視野の広がり」、「運命・信仰・伝統の受容」、「生きがい・存在感」、「自己の強さ」の6因子で構成されており、本研究の目的である、「親性の発達」の特徴を明らかにできると考えた。そこで、本論文では「親となることによる発達」の測定結果を「親性の発達」として捉えることとする。

### 4. 分析方法

母親の「親となることによる発達」27項目は平均値および標準偏差を算出し、値を確認後、主因子法バリマックス回転による因子分析を行った。7項目の効果は、効果「あり」群と、「なし」群に分類し、2群間でMann-Whitney検定により、「親性の発達」の各因子の平均値の比較を行った。また、子ども数、職業の有無、家族形態などの属性との関連について、 $\chi^2$ 検定を行った。統計ソフトはSPSS 15.0J for Windowsを用い、有意水準は5%とした。

### 5. 倫理的配慮

調査に際して、本研究倫理委員会の承認を得た。支援事業を行っている各施設長の了承を得た後、対象者に依頼書と調査票を配付した。依頼書には、研究目的とプライバシーの保持、調査協力は自由であり、強制ではないことを明記し、回収は返信用封筒に入れて各自が投函する方法とした。

## IV. 結果

回収数171名、有効回答166名（回答率67.5%）であった。

表1 対象者の概要 n=166

平均年齢±標準偏差	32.5±4.54歳
子ども数 1人	81名 (48.8%)
2人以上	85名 (51.2%)
子どもの平均年齢	2.7歳 (0~14歳)
職業 あり	57名 (34.3%)
なし	109名 (65.7%)
家族形態 核家族	134名 (83.8%)

## 1. 対象者の属性 (表1)

母親の平均年齢および標準偏差は32.5±4.54歳で、24~48歳の分布であった。子ども数は1人が48.8%、2人以上が51.2%、子どもの平均年齢は2.7歳 (0~14歳) であった。職業は、ありが34.3% (育児休業中17名含む)、なしが65.7%であり、家族形態は、核家族が83.8%であった。

## 2. 支援事業に関する母親の認識 (表2) および属性との関連

効果を問う7項目のうち、「子育て中の親と話ができた」は80.7%、「他の子どもと遊ばせられた」は80.7%、「いろいろの遊びを体験させられた」は80.1%、「子育て中の親と友人になれた」は51.8%、「悩みを相談できた」は48.8%、「子育ての知識が吸収できた」は43.4%、「子育てが楽しくなった」は24.1%が、効果があったと回答した。

効果の有無と対象者の属性との関連を見た結果、子ども数が1人か2人以上かにおいて、「悩みを相談できた」、「子育てが楽しくなった」の2項目に有意な差が認められた。2項目とも子ども数が1人のほうが多かった。職業の有無や家族形態などによる差は見られなかった。

表2 支援事業に参加した母親が捉えた効果

n=166

項目	人数 (%)
1 子育て中の親と話ができた	134(80.7)
2 他の子どもと遊ばせられた	134(80.7)
3 いろいろの遊びを体験させられた	133(80.1)
4 子育て中の親と友人になれた	86(51.8)
5 悩みを相談できた	81(48.8)
6 子育ての知識が吸収できた	72(43.4)
7 子育てが楽しくなった	40(24.1)

## 3. 母親の「親性の発達」の構成因子 (表3)

先行文献「親となることによる発達」の27項目を因子分析後、固有値1.0以上、因子負荷が0.40以上で、かつ2因子にまたがって0.40以上の負荷を示さない22項目を選出した。再度の因子分析により5因子が抽出され、第I因子は『柔軟さ・寛大さ』5項目 ( $\alpha=0.809$ )、第II因子は『視野の広がり』4項目 ( $\alpha=0.823$ )、第III因子は『生きがい・存在感』5項目 ( $\alpha=0.733$ )、第IV因子は『運や伝統、価値観の尊重』5項目 ( $\alpha=0.761$ )、第V因子は『自己抑制』3項目 ( $\alpha=0.748$ )と解釈された。5因子の $\alpha$ 係数はすべて0.70以上であり、22項目全体の $\alpha$ 係数も0.855で、内部一貫性が認められた。

先行文献<sup>8)</sup>の因子構造で示されている『自己の強さ』に構成されている項目は、今回の分類では『生きがい・存在感』や『運や伝統、価値観の尊重』の因子に含まれた。今回の対象者の子どもの平均年齢が2.7歳という子育て経験の短い母親で専業主婦が多かったという特徴から、自分の主義や主張を通すことや自分の健康に気をつけることが自己の強さとして捉えるより「存在感」や「価値観の尊重」として捉えたのではないかといえる。しかし、「親性の発達」の構成因子として、第1因子が『柔軟さ・寛大さ』であったこと、平均値が最も高かったのは『生きがい・存在感』であったことは先行文献と同様であり、「親性の発達」の状況を検討することは妥当であると考えられた。

各因子の平均得点および標準偏差は、因子Iが2.55±0.62、IIが2.62±0.73、IIIが3.36±0.55、IVが2.42±0.59、Vが3.04±0.57であった。なお、因子分析に当たっては天井効果が見られたが、今回は先行研究との比較のため因子分析の対象とした。

## 4. 効果の有無と「親性の発達」との関連 (表4)

7項目の効果のありとなしの2群間において「親性の発達」の5因子の平均値との比較を行った。その結果、「子育て中の親と友人になれた」という効果の2群間において、因子I『柔軟さ・寛大さ』の得点に有意な差があった ( $p < .05$ )。

また、「子育てが楽しくなった」という効果の2群間において、因子I『柔軟さ・寛大さ』

表3 母親の「親性の発達」の因子構造

n = 166

項 目	因子負荷量					平均値	標準偏差
	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5		
I 柔軟さ・寛大さ (5項目 α=0.809)						2.55(0.62)	
2. 考え方が柔軟になった	0.810	-0.032	-0.001	-0.027	-0.007	2.54	0.72
3. 他人に対して寛大になった	0.711	0.006	0.056	-0.040	0.104	2.54	0.79
1. 角がとれて丸くなった	0.696	-0.078	0.138	-0.052	-0.049	2.34	0.79
4. 精神的にタフになった	0.641	0.066	-0.124	0.060	0.012	2.75	0.91
5. 度胸がついた	0.535	0.121	-0.123	0.121	0.002	2.62	0.88
II 視野の広がり (4項目 α=0.823)						2.62(0.73)	
11. 日本や世界の将来について関心が増した	-0.012	0.836	-0.039	0.012	0.011	2.49	0.97
12. 環境問題に関心が増した	-0.110	0.830	0.043	-0.010	0.092	2.69	0.95
15. 日本の政治に関心が増した	0.194	0.676	0.040	-0.002	-0.112	2.29	0.88
13. 児童福祉や教育問題に関心を持つようになった	0.030	0.552	-0.021	0.032	-0.026	2.99	0.79
III 生きがい・存在感 (5項目 α=0.733)						3.36(0.55)	
23. 自分がなくてはならない存在だと思うようになった	0.010	-0.112	0.760	0.041	-0.021	3.18	0.86
22. 長生きしなければと思うようになった	-0.154	0.043	0.728	0.059	0.024	3.27	0.86
21. 生きている張りが増した	0.138	-0.062	0.499	-0.009	-0.019	3.33	0.78
25. 自分の健康に気をつけるようになった	-0.082	0.217	0.491	-0.064	0.027	3.34	0.85
24. 子どもへの関心が強くなった	0.062	0.008	0.478	-0.146	0.079	3.68	0.55
IV 運や伝統, 価値観の尊重 (5項目 α=0.761)						2.42(0.59)	
17. 運や巡り合わせを考えるようになった	-0.055	-0.069	-0.102	0.892	0.040	2.43	0.97
16. 物事を運命だと受け入れるようになった	0.025	0.037	-0.083	0.641	0.022	2.21	0.87
20. 人間の力を越えたものがあることを信じるようになった	0.002	0.044	-0.039	0.545	0.016	2.26	1.00
27. 自分の立場や考えはちゃんと主張しなければと思うようになった	0.082	0.055	0.227	0.481	0.036	2.53	0.83
26. 多少他の人と摩擦があっても自分の主義は通すようになった	0.069	0.035	0.245	0.428	-0.150	2.05	0.75
V 自己抑制 (3項目 α=0.748)						3.04(0.57)	
6. 他人の迷惑にならないように心がけるようになった	0.044	0.030	0.051	-0.134	0.710	3.10	0.80
8. 他人の立場や気持ちをくみ取るようになった	0.085	-0.073	0.063	0.058	0.698	2.97	0.75
9. 人との和を大事にするようになった	-0.074	0.028	-0.040	0.128	0.677	3.16	0.73
累積寄与率	25.28	36.00	45.60	52.75	58.77		

( $p < .10$ )と因子II『視野の広がり』( $p < .10$ )の得点に弱い差の傾向を認めた。

### V. 考 察

支援事業に参加した母親を対象として、参加して得た効果と「親性の発達」との関連について検討した。

#### 1. 支援事業に参加して得た効果

支援事業に参加して得た効果として、選択の割合が高かった「子育て中の親と話ができた」、「他の子どもと遊ばせられた」、「いろいろの遊びを体験させられた」の3項目は、その場に子

どもと居ることで容易に得られる成果であると思われる。一方、「子育て中の親と友人になれた」、「悩みを相談できた」、「子育ての知識が吸収できた」の各効果は、母親が積極的に活動の輪に参加しないと得にくいものであり、効果があったと回答した母親は約半分であった。特に、「子育てが楽しくなった」母親は約1/4であり、支援活動を通して子育ての楽しさを十分に実感できていないことが推察できた。これらの状況は、支援事業の運営方法が施設側主体で、母親は計画したプログラムに受身で参加して過ごしているのではないかと推測できる。

支援事業で見られる育児グループの成り立ち

表4 母親の「親性の発達」と子育て支援事業の効果の有無との関連

n=166

	I 柔軟さ・寛大さ		II 視野の広がり		III 生きがい・存在感		IV 運や伝統、 価値観の尊重		V 自己抑制		
	効果	M (SD)	p値	M (SD)	p値	M (SD)	p値	M (SD)	p値	M (SD)	p値
① 子育てしている母親と 話ができた	あり	2.55(0.63)	n.s.	2.60(0.63)	n.s.	3.36(0.54)	n.s.	2.27(0.65)	n.s.	3.07(0.63)	n.s.
	なし	2.59(0.59)		2.70(0.71)		3.38(0.59)		2.41(0.55)		3.11(0.59)	
② 子育てしている母親と 友人になれた	あり	2.64(0.61)	p<.05	2.60(0.80)	n.s.	3.42(0.52)	n.s.	2.33(0.62)	n.s.	3.11(0.65)	n.s.
	なし	2.46(0.61)		2.64(0.64)		3.30(0.58)		2.25(0.65)		3.03(0.59)	
① 子どもに遊びを体験さ せられた	あり	2.57(0.58)	n.s.	2.63(0.74)	n.s.	3.40(0.49)	n.s.	2.29(0.60)	n.s.	3.11(0.61)	n.s.
	なし	2.50(0.75)		2.56(0.68)		3.20(0.72)		2.31(0.76)		2.93(0.68)	
① 他の子どもと遊ばせら れた	あり	2.58(0.60)	n.s.	2.61(0.73)	n.s.	3.36(0.54)	n.s.	2.28(0.62)	n.s.	3.08(0.63)	n.s.
	なし	2.45(0.69)		2.63(0.71)		3.36(0.58)		2.35(0.70)		3.03(0.58)	
① 子育ての知識や知恵が 吸収できた	あり	2.63(0.58)	n.s.	2.67(0.76)	n.s.	3.40(0.46)	n.s.	2.34(0.65)	n.s.	3.13(0.63)	n.s.
	なし	2.50(0.64)		2.57(0.70)		3.33(0.61)		2.26(0.62)		3.03(0.61)	
① 子育ての疑問や悩みを 相談できた	あり	2.61(0.64)	n.s.	2.65(0.78)	n.s.	3.40(0.52)	n.s.	2.32(0.67)	n.s.	3.11(0.69)	n.s.
	なし	2.50(0.60)		2.58(0.67)		3.32(0.57)		2.27(0.59)		3.04(0.55)	
① 子育てが楽しくなった	あり	2.71(0.58)	*p<.10	2.78(0.72)	*p<.10	3.50(0.44)	n.s.	2.31(0.64)	n.s.	3.23(0.65)	n.s.
	なし	2.50(0.62)		2.56(0.72)		3.32(0.57)		2.29(0.63)		3.03(0.61)	

ノンパラメトリック検定 Mann-Whitney 検定

は、行政主導型と参加者による自主型に大別されるが、沼田<sup>11)</sup>は育児グループの効果について、二者の比較をしている。その中で、行政主導型育児グループの効果は、「相談ができる場」、「遊び場の確保」などであり、自主型育児グループの効果は「交流の場」、「情報が得られる場」などであったとしている。今後、子育て支援活動が母親同士の交流の場としての効果を期待していくためには、個々の母親の子育て経験状況を把握し、ニーズに合わせて母親同士の人間関係が円滑になるような工夫や、母親自身による自主的な育児グループの育成ができるような場の設定を目指す必要がある。

## 2. 効果と「親性の発達」の関連について

「子育て中の親と友人になれた」と捉えた母親のほうが、「親性の発達」の『柔軟さ・寛大さ』の得点が有意に高かった。『柔軟さ・寛大さ』は、周囲の人との関係性を円滑に進めていくために重要な要素である。ただ単に、他の母親と話ができたという効果ではなく、友人関係が築けたと捉えられるような支援事業のあり方を検討することが重要である。友人になれるということは、他の母親と話ができた以上に親密性が増し、自分の思いが伝えられるので、育児のストレス

軽減にもつながるといえる。決められたプログラムに沿った支援事業だけでなく、自分の気の合う仲間が発見できるような場にするのも大切だと考えられる。

また、「子育てが楽しくなった」と捉えた母親のほうが『柔軟さ・寛大さ』と『視野の広がり』の得点がやや高い傾向を示した。つまり、そのような母親は、周囲の人の考えを柔軟かつ寛大に受け入れ、世の中の出来事にも関心がもてる気持ちのゆとりがあると思われる。実際には、子育てが楽しいと思う時もあれば、嫌になる時もあり、気持ちは変化すると思われる。しかし、子育てを多角的に、また、ポジティブに捉えていることが推察できる。

子育てグループに参加した母親の感想を分析した中村<sup>2)</sup>は、「煩わしい人間関係」、「企画運営の煩わしさ」などのネガティブな項目と、「仲間づくり」、「不安解消」、「有益な情報」などのポジティブな項目を抽出し、ネガティブな感想は子育て経験の浅い母親で大きくなっていると述べている。他の親と話をするのが煩わしいことと捉えてしまうと、交流を通した育児の楽しさを十分に体験できていないかもしれない。また、子育て教室や育児サークルなどの集団の場に加わっても、すぐに他の母親との交流が

深められるわけではないという指摘もある<sup>3,12)</sup>。特に、育児経験の浅い母親を対象とした支援事業で、母親の『柔軟さ・寛大さ』や『視野の広がり』を促すような関わりをするためには、ゆっくり自分の子育てを振り返られるように、参加者の状況やニーズに合わせた支援が必要であるといえる<sup>13)</sup>。

一方、「親性の発達」のうち『生きがい・存在感』、『運や伝統、価値観の尊重』、『自己抑制』の各因子と成果の関連は見られなかった。これらの因子の発達は、川井ら<sup>14)</sup>や坂間ら<sup>15)</sup>が指摘するように、同じような子育て中の母親との交流よりはむしろ、子どもとの関係や夫、家族との関係、地域の人々との関係、母親自身の興味と関心の方向や価値観など他の要因が影響するのではないかと考えられる。

以上のことから、支援事業に参加して、他の親と交流ができ、子育てを楽しいものと捉えられた母親は、「親性の発達」のうち『柔軟さ・寛大さ』や『視野の広がり』が他の母親に比べて大きいことが示唆された。母親が、支援事業の活動に主体的に参加することで、柔軟さや視野の広がりが促進される可能性があると考えられる。

## VI. 結 論

支援事業に参加した母親を対象として、参加して得た効果と「親性の発達」について調査分析を行い、以下の結果を得た。

支援事業に参加して、子育てを楽しいものと捉えた母親は、『柔軟さ・寛大さ』と『視野の広がり』が見られ、他の親と友人になれた母親は、『柔軟さ・寛大さ』が見られる傾向（有意差あり）を示した。

## VII. おわりに

今回は支援事業の効果と「親性の発達」について、一時点で調査してその傾向を見たが、「親性の発達」を支援事業の効果と関連付けて評価するためには、経過の中でその変化を把握する必要がある。また、母親は子育てを通じたさまざまな場面でサポートを受けながら親として発達していると考えられる。子育て支援の場がその一役を担えるために、今回の結果を一資料とし、今後継続的に調査し分析していく必要がある。

## 文 献

- 1) 富岡晶子, 前田留美, 新町豊子. 育児支援に関する研究の動向と課題. 川崎市立看護短大紀要 2005; 10 (1): 1-10.
- 2) 中村 敬. 育児不安軽減に向けた取り組み. 小児保健研究 2004; 63: 118-126.
- 3) 小原倫子. 母親の抑うつおよび情緒応答性と育児困難感との関連. 小児保健研究 2005; 64: 570-576.
- 4) 大沼珠美, 桑名佳代子, 桑名行雄, 他. 乳幼児をもつ母親および父親が体験する育児困難と育児支援サービスへの要望. 宮城大学看護学部紀要 2003; 6 (1): 83-96.
- 5) 松野郷有美子, 永井真知子, 相田一郎, 他. 育児不安を抱えた母親に対するグループ・ケアの試み. 小児保健研究 2004; 63: 453-458.
- 6) 西原玲子. 母親の育児不安と双生児の精神運動発達との関連性の検討. 日本公衆衛生雑誌 2006; 53: 831-841.
- 7) 小川佳代, 野口純子, 竹内美由紀, 他. 地域子育て支援研究会の活動. 香川県立保健医療大学紀要 2007; 3: 207-213.
- 8) 柏木恵子, 高橋恵子. 発達心理学とフェミニズム. 初版. 京都市: ミネルヴァ書房 1998: 42-45.
- 9) 内閣府国民生活局. 子どもを持つという選択. 国民生活白書—子育て世代の意識と生活—. 東京: 政府刊行物センター官報販売所 2005: 34-46.
- 10) 野口純子, 舟越和代, 大池明枝, 他. 子育て支援センターを利用している母親の育児ストレス. 香川母性衛生学会誌 2007; 7 (1): 40-45.
- 11) 沼田加代. 育児グループの形態別にみた育児不安と育児グループの効果に関する検討. 群馬保健学紀要 2004; 25: 15-24.
- 12) 松野郷有美子, 島田美帆, 水井真知子. 旭川市保健所における乳幼児健康相談の現状とその役割. 保健師ジャーナル 2004; 60: 466-471.
- 13) 山崎あけみ. 育児期の家族の中で生活している女性の自己概念. 日本看護学会誌 1997; 17 (4): 1-10.
- 14) 川井 尚, 庄司順一, 千賀悠子, 他. 育児不安に関する基礎的検討. 日本総合愛育研究所紀要 1994; 30: 27-39.
- 15) 坂間伊都子, 角間陽子, 草野篤子. 育児ストレスの規定要因に関する研究. 日本公衆衛生雑誌 1999; 46: 250-262.